真夜中三重丸
ステータス改変アプリ
~淫らに堕ちていく清楚な彼女~

プロローグ　アプリダウンロード
１話　ヒロイン登場＆試験運用
２話　胸を押し付けたくなる
３話　スカートの中を見て欲しくなる
４話　大胆になってきた日常
５話　彼女はセクハラしても抵抗しない

6話　セクハラはさらに激しく……
7話　授業中にもセクハラ三昧
8話　保健室で倉沢さんと2人で……
9話　彩菜との露出デート
10話　彩菜の家で勉強からの……
11話　ずっと一緒に……

プロローグ　アプリダウンロード

今日は待ちに待った新作アプリゲームのリリースの日だ。
ベッドに置いていたスマホを手に取り検索を始める。
「お、あったあった」
早速ダウンロードを始める。
１０、２０……５０％、どんどんダウンロードが進んでいく。

プツッ

いきなり画面が真っ暗になる。
「なんだ……アプリが重すぎて落ちちゃったのかなぁ。しょうがない、再起動してもう一度ダウンロードしてみるか。」

電源ボタンを押し、スマホを再起動し、ホーム画面が表示される。
すると、見覚えのないアイコンがホーム画面に表示されているのが見えた。
「お、スマホ落ちたけどダウンロードは出来てたのかな？」
早速アイコンをタップしてみると、画面上に

『ステータス改変アプリ』

と大きく表示された。
なんだこれと思いつつも興味本位でもう一度タップしてみると
画面にアプリの説明が表示される。
このアプリは人間のステータスを表示、改変できるものです。
アプリを起動し、対象としたい人物の顔を思い浮かべながら名前を入力すると登録が行われ、その人物のステータスが画面に表示されます。
ステータスを記載、消去することで現実世界の人物に反映されます。
（なんだこれ……詐欺アプリかな？）

しかし気になってしまった俺は説明文を読み進める。
まずは自分のステータスを確認してみましょう！
あなたの名前を入力してください。
（ふーん、まあとりあえずやってみるか）
『高井　翔太』
っと・・・。
そうすると画面には自分のステータスが表示されていた。

【名前】高井 翔太（17歳）
【職業】学生
【身長】171cm　【体重】56ｋｇ
【好きなもの】大福、お笑い番組
【嫌いなもの】納豆
【備考欄】
童貞、彼女いない歴＝年齢

と表示されている。

「えぇ！？なんでこんなことまでわかっちゃうわけ？怖っ。まさか・・・本物なのか？」

これだけではまだ半信半疑だった俺はアプリの真偽を確かめるために【嫌いなもの】の欄から納豆を消去し、【好きなもの】の欄に記入すると画面上に『ステータス改変が完了しました』と表示される。

「これでいいのか？」

俺は子供のころから大の納豆嫌いで匂いを嗅ぐだけで受け付けなかった。

それが改善されたのならば本物だと確信できる。

俺は2階の自分の部屋から飛び出し階段を降り、1階の台所に置いてある冷蔵庫を開けた。

「あった、納豆だ」

俺は納豆嫌いだが父親は大の納豆好きで朝は納豆とご飯と決まっている。

なので冷蔵庫には納豆が常備してあるのだ。

早速手に取ると2階の自分の部屋に持って行く。

そして部屋の机の上に納豆を置く。
「本当に好きになっているのか」
ドキドキしながら試すことにする。
パックを開け納豆に顔を近づけ、思いっきり鼻で息を吸ってみる。
「めちゃくちゃ美味しそうな匂いだ」
あれだけ嫌悪していた納豆の匂いが食欲をそそる甘美な香りに感じる。
さらに納豆を口に入れ噛み始める。
「旨い！こんなに納豆が美味しく感じるなんて！このアプリ本物だ」
俺は興奮気味に呟きながら食べ続ける。
結局全部食べきってしまった。
「あぁ、幸せだ・・・」
このアプリを使えばいろいろなことができるに違いない。
興奮した俺はベッドの上でアプリの使い道を夜中まで考えながら眠りにつくのだった。

1話　ヒロイン登場&試験運用

チュンチュン……小鳥たちのさえずりと共に目を覚ます。
昨日は夜遅くまで起きていたがこれから起こるワクワクを考えると全く眠くない。
いつもより元気なぐらいだ。
歯を磨き、制服に着替え、朝ご飯を食べるといつもより30分も早く家を出る。
満員電車に２０分揺られながら最寄りの駅に到着。
校門の前までやってきた。
目的の人物ももうすぐ登校してくるはずだ。
俺は心臓のドキドキを抑えながら、『友達を待っていますよー』というような雰囲気を醸しながらグラウンドで朝練をする野球部を眺めていた。
まだ登校には時間が早いため人がまばらな校門の前。

ちらちらと眺めていると目的の人物が歩いてきた。
実際には１０分も待っていないのだが、永遠とも感じられる時間。
スマホをさっと取り出し、昨日登録しておいた名前を呼び出す。

【名前】倉沢　彩菜（１７歳）
【職業】学生
【身長】１５７ｃｍ　【体重】４９ｋｇ
【スリーサイズ】　Ｂ９６（Ｈ）　Ｗ６０　Ｈ９４
【好きなもの】甘いもの　ぬいぐるみ
【嫌いなもの】数学
【備考欄】
処女　彼氏いない歴＝年齢

そう、俺が待っていた人物は、倉沢彩菜だ。

彼女は俺と同じ2年B組のクラスメイトで、この学校のマドンナと言われているスーパー美少女である。
肩ほどに切りそろえられたサラサラとした黒髪、大きな瞳、透き通るような白い肌、整った顔立ちにグラビアアイドルのような抜群のスタイル。
まさに学園一の美貌といっても過言ではない女の子。
そんな彼女の魅力は外見だけではなく内面にもしっかりと反映されているようで、誰に対しても優しく、気配りができ、男女関係なく人望もある。
それだけでも十分すぎるくらいだというのに、倉沢さんは勉強もよくでき、学年トップクラスの成績を誇るらしい。
まさに非の打ちどころがない完璧超人の女の子なのだ。
以前は野球部のエースが告白したとか、学校一のイケメンが告白するも玉砕したとか、噂がたびたび上がっていたのだが、最近はみんな告白するのをあきらめ彼女を眺めるだけで満足しているようだ。
まあ、裏では倉沢彩菜ファンクラブなるものが出来て、彼女の写真が高値で取引されているとかいないとか。
そんな彼女に俺はひそかに恋心を抱いていた。

しかし、そんな高嶺の花の彼女と俺が全く釣り合うわけもなく、同じクラスになったにもかかわらず挨拶以外片手で数えられるぐらいしか、会話した記憶がない。
しかし、このアプリが手に入った今、そんな過去とはおさらばだ。
このアプリを使って彼女を手に入れるんだ！
そう意気込み、スマホを操作する。
アプリの表示された画面にタッチすると、
早速【好きなもの】の項目に『高井　翔太と会話をする』と記入した。
うん、決して俺はヘタレではない。
まずはこれぐらいから始めていかないと、こんな人類の叡智を超えたアプリなんだから何が起こるか分からないからな。
もう一度言っておくが決して俺はヘタレなんかじゃない、慎重派なんだ。

『ステータス改変が完了しました』

画面のその文字を確認すると心臓の鼓動を感じながらいつもより速足で彼女のもとへ向かっていく。
しかし緊張しすぎて声が出ない。
「お、おはよう！」
やっと出た言葉がこれだった。
「あ、高井くん、おはよー」
彼女は笑顔で応えてくれる。

いつもなら、これだけで会話が終わるはずだが……
「ねぇ、高井くん、今日はやけに早いね。どうしたの？」
彼女が話しかけてきた。
「そ、そうかな？たまたまだよ」
「ふーん、私、高井くんのこと待ってたんだけどなぁ」
「え！？」
「冗談だよー」
「あっ、ああびっくりした」
「ふふっ」
こんなに長く喋ったのは初めてだ。
「ねえ、高井くんはどうしてこんなに早く来たの？」
「えっ！？それは……」
まさか、あなたと話すためです！なんて言えるはずもない。
「え、えっと、なんか今日は寝覚めが良くて早く学校に来ちゃったんだよ」
「へぇ、そうなんだ」
「う、うん」

「じゃあさ、せっかくだし一緒に教室まで行こうよ」
「え！？」
「だめ？」
「い、いや、いいけど……」
「やった！それじゃあ行こっか！」
そう言うと彼女と並んで歩き始めた。
心臓のバクバクが止まらない。
俺は今、人生で初めて女の子と2人きりで登校している。
それもあの超絶美少女の倉沢彩菜とだ。
と言っても校門から教室までの短い間だけなのだが。
今までの人生でここまで幸せなことはあっただろうか。
いや、ない。
しかしこのアプリを使えばこれ以上の幸せが待っているだろう。
頭の中でぐるぐると妄想を掻き立て2人で教室へ向かうのだった。

2話　胸を押し付けたくなる

「おはよー」
「おはよう」
教室へ着くと俺の隣にいた倉沢彩菜に対して次々と挨拶が飛ぶ。
教室のクラスメイト達は俺のことが全く目に入ってないようだ。
まあ、普段から存在感が無いから仕方ないか。
「じゃあ、また」
「うん、またね」
彼女の返事を聴きながら俺は自分の席に着いた。
「翔太、お前倉沢さんと一緒に教室へ入って来たけどそんなに仲良かったのか？」
後ろから肩をポンと叩かれる。
振り向くとそこには親友の矢部隆志がいた。

「い、いや、たまたま校門の前であっただけで特に仲良くは……」
まさかアプリの力を使ったともいえるはずもなく少しどもってしまう。
「まあ、そうだよな。倉沢さんは誰にでも気兼ねなく接してくれるし、お前なんかでも一緒に教室に行ってくれるぐらいの女神だからな。
マジでお前なんかじゃ一生手に入れられない高嶺の花ってやつさ」
「まあ、そうだよな。俺なんかじゃ一生相手にされないさ」
なんて言いつつも心の中で「アプリを使って倉沢さんを手に入れてお前を驚かせてやるぜ」なんて考えていた。

1時間目の国語の授業中、先生に隠れて机の下でスマホを弄っていた。
画面上には倉沢さんのステータスが映っている。
朝のステータス変更は上々の出来だった。次はもっと大胆な変更をしてみる予定だ。

【好きなもの】甘いもの　ぬいぐるみ
高井翔太と会話をする
高井翔太に胸を押し付ける

【好きなもの】の欄に記入したのは胸を押し付ける。我ながらなんて素晴らしい(あほらしい)ことを考えたのだと。
いきなり【好きなもの】の欄に高井翔太と記入すればすぐに俺のことを好きになってくれると思うのだが、そんなのつまらないじゃないか。
こうやって学生のたぎる性的欲求を満たしつつ少しずつ彼女を攻略していく。
それが俺のポリシーなんだ。
それにあの清廉な倉沢さんが情欲に負け、俺に対してどのようなアピールをしてくるかを考えただけで、俺のあそこは授業中にもかかわらず固くなってしまっている。

そんなこんなで倉沢彩菜の【好きなもの】に胸を押し付けるという項目を追加し終えたが、2、3、4時間目も終わってしまい彼女からのアピールもないまま昼休みになってしまった。
恐らく彼女の心の中では俺に胸を押し付けたいという気持ちとそんなことをするなんてはしたないという気持ちが戦っているのだろう。
そんなことを考えながら椅子から立ち上がると、倉沢さんが後ろから近付いてきた。
「あ！」
そう彼女が叫ぶとこっちに倒れこんできた。

むにゅっ

倉沢さんが転びそうになり俺にしがみつくと同時に彼女の胸が俺の背中に思いっきり押し付けられる。

その感触はまさにマシュマロのように柔らかく、弾力性もあり、それでいて張りがある今までに味わったことのないものだった。
（うぉおおおお！！）
思わず叫びそうになるところを必死に抑える。
「ご、ごめんなさい！ちょっと足がもつれちゃって……」
「大丈夫？」
俺は振り返ると倉沢さんの顔を見つめる。
彼女の顔は真っ赤になっていた。
「あ、ありがとう。高井くんのおかげで助かっちゃった」
彼女は恥ずかしそうに俺から目をそらしながらそう言った。
彼女の心の中は今どうなっているのだろう。
情欲に負け今まで男に触られたことがないであろう豊満な胸を自分の意志でアクシデントに見せかけ
俺の背中に押し付け性的欲求を満たしたのだ。
その背徳的な快感と羞恥心に悶えているのだろうか。
「高井くん、今のは忘れてね……」

「うん、わかったよ」
俺は平静を装いながらそう答えたが内心では明日からもこの快感を味わえるというワクワクでいっぱいだった。
放課後になると倉沢彩菜はいつも通り友達と帰っていった。
俺もいつも通りに帰宅する。
電車に乗りスマホを取り出しステータス改変アプリを起動させる。
そして新たなステータスを追加する。

【好きなもの】高井翔太に下着を見られる　異性を興奮させるようないやらしい下着を着用する

これで倉沢さんが自分で選んだエッチな下着を身に着け俺に見せてくれるはずだ。
彼女がどんな下着を選択するのか色々妄想しながら帰路に就くのだった。

3話　スカートの中を見て欲しくなる

今日も倉沢さんと話すために早めに登校。
校門前で待ち構えていると彼女の姿が見えた。
彼女に挨拶をしようと駆け寄る、
ん、なんか彼女の雰囲気が何か違う気がする。
よく見ると、今日の彼女はスカート丈が短くて太ももが見え隠れしている。
この学校のスカート丈には指定がないため可愛く見えるといった理由でスカート丈が短い女子が多いのだが、
倉沢さんはいつもひざ丈ぐらいの長さのスカートを履いていたのだ。
それが今日はほかの女子たちと同じように男子の欲情を煽るようなスカート丈だった。
「お、おはよう」
俺は少し緊張しながらも声をかける。

「おはよー」
いつも通りの笑顔で応えてくれた。
「ど、どうしたの？そのスカート短くして」
「え、まあちょっとした気分転換かなー」
少し恥ずかしそうに言う。
「まあ、そういう気分の時もあるよね」
「そうそう、そんなに気にしないでよー」
そんな他愛のない話をしながら下駄箱に着く。
「高井くん最近登校する時間早いよねー」
と言いながら彼女は靴箱から上履きを取り出す。
何気ない会話だが声が若干上ずっている気がする。
なにか緊張しているみたいだ。
「なんか最近朝早く目覚めちゃって」
なんて言いながら
自分の靴箱から上履きを取り出し地面に置き、少しかがむ。
下を向き上履きを履いている最中、

「うーん足がちょっと大きくなっちゃったのかなぁ。なかなか上履きが履けないよ」
彼女の独り言のような声に釣られ何気なく顔を上げ彼女の方を見てみる。
すると目の前には白いショーツに包まれた大きなお尻があった。
普通であればしゃがみこんで上履きを履こうとするのだろうが俺にショーツを見てもらうためにわざと膝を曲げずに履こうとしているのだろう。
それに加えいつもより短いスカート丈のため、スカートは下着を隠す役割を全く果たしておらず丸見えになってしまっている。
彼女のショーツは白色のシンプルなものだった。
昨日、異性を興奮させるようないやらしい下着を着用するようにステータスを改変したのだが、まだ自前でエッチな下着を持っていないからであろう、彼女の見た目通りの清楚な純白のショーツだった。
しかし、恐らくこれが彼女の自前で持っている下着の中で彼女が思う一番いやらしい下着なのだ。
その事実が俺を興奮させる。

さらに俺を興奮させるのはそれだけではない。
なんとショーツは思いっきり食い込んでおり、いやらしさを倍増させている。
恐らく彼女は白いショーツを見せているだけだと思っているのであろうが、眼前に広がる白い布は少し、大部分が肌色の大きく育ったお尻なのである。
こんなに大きな尻なんだからいつもショーツが食い込みまくっているんだろうな。
彼女のスカートの下の秘密を知れて大満足だ。
「やっぱり、全然うまく履けないよー」
なんて白々しい独り言を言いながらまだ上履きが履けないふりをしながら、お尻を大きく揺らしている。
もっと見て欲しいってことだよな。
俺はお望み通りじっくり眺めることにした。
「うーん、なんかサイズが合わないかも」
なんて言いながら今度は腰をくねくねと動かし始めた。
くねくねと動かす度に白く柔らかそうな生のお尻が俺の目の前で揺れる。

調子に乗った俺はさらに顔を近づけ顔とお尻との距離は15ｃｍほどとなった。
そこで気付く。
倉沢さんの下着の股間部分に明らかにシミがあると。
あの清楚な彼女が俺に下着を見せつけることに興奮して、こんなことになっているなんて。
俺は彼女のシミから目が離せなくなってしまった。
そしてついに我慢できなくなった俺は、
「倉沢さん、上手く履けないなら俺が手伝おうか？」
と提案する。
「いいの！？じゃあお願いしようかな」
彼女は上履きを渡してくる。
そして彼女の前に回りしゃがみ込んだ。
「じゃあ右足を上げてみて」
倉沢さんは俺の肩に両手を乗せ言葉に従い片足をゆっくりと上げる。

下からスカートを覗きこむような体制に自然となり、目の前に倉沢さんの綺麗な足と純白のショーツ、さらに、先ほどよりはっきりと浮かび上がってきているシミが見えた。
その光景に興奮し、俺のあそこはもう痛いくらいに勃起していた。
俺が彼女のショーツを凝視して興奮していることにはもちろん気付いているはず。
しかし、彼女はあくまでも見られていることに気付いてないという姿勢を取り続ける。
「はい、これで大丈夫」
彼女に上履きを履かせると立ち上がり、倉沢さんの顔を見る。
彼女は俺の顔を見つめる。その表情は赤く染まり、息遣いも荒くなっている。
「高井くん、ありがとう。手伝ってくれて助かっちゃった」
「うん、どういたしまして」
「私お手洗い行くから先に教室行ってね」
さすがに恥ずかしさに耐えきれなくなり少し一人になりたいのか、トイレに行くと告げてきた。
「わかった。また後で」

「うん、またね」
そう言って倉沢さんは小走りで去っていった。
さてと、俺もバキバキに勃起したあそこをどうにかしないと。
そう思いトイレに向かうのだった。

＊

顔を熱くしながら高井くんから逃げるようにトイレに駆け込み個室へ入った。
しばらく一人になって頭を冷やしたかった。
なんてことをしてしまったんだろう。
私は高井くんの前では平静を装っていたけど内心ドキドキだった。
だって自ら高井くんに下着を見られるように仕向けたのだから。
高井くんが私のスカートを覗くためにわざわざ屈んでくれた時はすごく嬉しかった。

昨日いきなり高井くんに下着が見られたいという思いが沸き上がってしまった。
どうやったら見てもらえるか。
もちろん私が彼の目の前でスカートをめくりあげて見せつけるなんて行為はできない。
変態と思われて学校中に噂が流れてしまったらもう普通に生活を送ることができなくなる。
どうすれば良いのか。
一晩中考えたがとりあえずスカートを短くする以外の案は浮かばなかった。
しかし、さっき校門の前で彼に出会ったとき、思いついてしまった。
一緒に下駄箱まで行けば靴を履き替える時に見せることができるのではないかと。
そう考え、高井くんに話しかけた。
高井くんに下着を見られる作戦は成功した。
今朝、高井くんに見てもらうために選んだ下着。
本当はもっと喜んでもらえるように大人な下着を履きたかったのだが、あいにくそういったものは持っていなかったので、自分の一番お気に入りの下着を着用することにした。

でもあんなに近くで見られてしまうとは思わなかった。
高井くんの視線をあそこに感じた。
恥ずかしさのあまり頭がおかしくなりそうだった。
高井くんの視線を感じるたびに体がゾクッとして、気持ちよくなってしまう。
きっとあのままだと変な声が出てしまっていたと思う。
なんとか誤魔化せたみたいだけど。
彼が私の前にまわって上履きを履かせようとしてくれた時ズボンが膨らんでいるのが見えた。
高井くんが私に欲情してくれていると分かったときは嬉しくて思わずニヤけそうになってしまった。
高井くんは今頃、私の下着で頭がいっぱいになってくれてたりするのかな。
そんなことを考えていると無意識に手が自分のあそこに伸びていた。

くちゅっ

ショーツの上から手を触れると明らかに湿っていた。
その感触に驚き思わず手を引いてしまった。
「うそっ」
私は急いでショーツを脱ぎクロッチ部分を確かめる。
その部分は私から溢れ出た愛液によってしっかりと濡れてしまっていた。
それは表部分から見てもはっきりと分かるものだった。
「このシミ……高井くんに見られてないよね……」
うん、見られてない。シミはさっき出来たものだから。
あの時はまだシミはなかったはず。
そう自分に言い聞かせる。
「もし見られてたら……絶対このことを思い出してオナニーしちゃうよね……男の子だもん」
高井くんが私のことを思って自慰行為をする。
そのことを想像しただけで興奮してしまう。
興奮が抑えきれない私は右手を股間に伸ばしクリトリスを弄り始める。
学校のトイレでのオナニーという背徳感がいつもより快感を増幅させる。

くちゅくちゅという私のあそこから出る卑猥な水音だけが静かな空間に響く。
こんなところでオナニーするなんていけないことだとは分かっているのだが
快楽に抗えるほどの理性は残っていなかった。
「あっ♡だめぇ♡」
いつもより強い刺激にすぐに絶頂を迎えそうになる。
「高井くん、高井くん、イっちゃう、イクぅうううう♡」

ビクンッ 体を震わせ、達した。

「はぁはぁはぁ」
いつもより激しくイッてしまったため呼吸が乱れている。
落ち着くために大きく深呼吸をする。
しかし、落ち着いたと思った瞬間、高井くんにショーツを見られたことを思い出してしまう。
そしてまた、体が疼いてしまう。

「もう一回だけならいいかな」
再び股間へと手が伸びる。
「あんっ、ダメなのにぃ、、んふぅ、、はぁはぁ、、、、ん、、、、、、」
そして2回目の絶頂を迎えた。
「はぁはぁはぁ」
さすがに連続でのオナニーは体に堪える。
息を整え、トイレットペーパーで股間を拭こうとしたその時、ガチャリと扉が開く音が聞こえた。
（え、誰か入って来た！？）
私は慌ててショーツを穿き直し、スカートのシワを伸ばして個室から出た。
「危なかった。もう少し誰か入ってくるのが早かったら声聞かれてたよね。気をつけないと」
ドキドキを抑え大きく深呼吸を行った後、教室へ向かうのだった。